

モノトーンによる表現の可能性Ⅲ

金 藤 完三郎

I. はじめに

2004年10月30日－11月14日、福岡で「The 19th Asian International Art Exhibition」(第19回アジア国際美術展覧会)が開催された。この美術展は11カ国・地域の美術家が集うもので、今年 of 主管国は日本のため、福岡アジア美術館を中心に展示が行われた。本稿では、この展覧会にアジア国際美術展推薦選考委員会から、推薦作家として出品依頼された作品『破壊されたピラミッド』(Destroyed Pyramid)について考察を進めてみる。なお、作品は、7月に美術館搬入し図録撮影を行っている。

本稿に掲載している作品は、これまでの実験的作品に引き続き、線描表現に的を絞り、それらがイマジネーション刺激におよぼす根源的な力を明快にするため、次の2点の使用をできるだけ制限している。1. 線描材料 2. 色材 これらについてその種類と使用面積を最小限に抑えている。

制作したサイズは、これまでのモノトーンシリーズ作品の中で最大となるF100号(タテ1621×ヨコ1303mm)である。基底材の紙は実験材料の中からCANSON MONTVALを木質パネルに水貼りして使用した。この紙は300gの水彩紙で水溶性着色材に対応できる厚く腰が強い特長を備えている。初めての大サイズに挑戦することは、モノトーンシリーズの可能性を物理的な面積の視点から探ることを意味する。

作品制作にあたり使用した主材料は、これまでの内容を引き継ぎ、線描で

はホルダー芯，色材では色鉛筆であるが，線描の副材料として木炭を追加使用している。色材ではストローク描法自体は変化していないが，これまでの線描を意識したものから塗りを意識したものに变化している。消し具についてはこれまでと同じく使用を制限している。

Ⅱ. 制作のコンセプト

口とは一体何だろうか。

食・飲・会話・歌・音波・表情・口づけ。怒り，笑う，傷口を舐め，息をする，吐息で心を安め，溜息で気を吐く。花に口はない，でも生きている。我々はたくさんの口に囲まれ暮らしている。人は音を耳で聴くが，声は心で聞いている。建築は物で建ち，社会は人で立つ。破壊のとき，人は叫び，あるいは沈黙する。

言葉は化石になれるのだろうか。

人は言葉で励まされ，言葉で傷つく。言葉を記録することはできても，言葉の力を留めることはできるのだろうか。そもそも言葉にかたちはあるのだろうか。言葉の力とは意志の力そのものだとすれば，たとえばこの絵画のうちに存在する無数の描線は，無数の意思の存在証明であり，無数の言葉の化石である。なぜなら，意思なく描かれる線は一本として無く，また，時間の瞬きをすべて埋め込むように，描線を消す行為をしていないからである。

自分と自分以外の境界はどこにあるのだろうか。

口から発した言葉は，その瞬間に自分を離れる。それはどこで消えるのだろうか。口に届いた食べ物は，その時から体の一部になっていく。それらは層となり，あるいは色素となり身体を染め上げていく。目と耳と指は外の世界を感じ取ることはあっても，取り込むことはしない。だが，鼻と口は自らの意思で貪欲に多くを取り込み，そして多くを発する。そこは自分以外の世界との最も烈しい接点かもしれない。自分の身体に合うように咀嚼し，また噛み砕く。時には呻き声をあげながら。

花に口はなくても、風や雨の無数の音の中で、迷いなく陽の手掛かりをみつめる。そして風に花卉の色を輝かせている時、その静かな声を感じ取る。

この作品では、異なる種類の時間と幾つかの瞬間の感情が閉じ込められている。それらが形を変えながら、観る人の忘れられていた記憶の鍵穴からイメージを呼び戻すトリガーになれることを期待している。

Ⅲ. 実験作品について

『破壊されたピラミッド』（Destroyed Pyramid）F100号について、7枚の画面写真を取り上げ、順次写真ページに掲載している。以下、各写真に沿って主な線描方法と結果の要点を解説していく。

Ⅲ－1 全体画面

画面中央を上下に走る色彩は色鉛筆によるものである。ハッチング描法であるが、横方向のスリットを入れていく段階で、徐々に面としての塗りが前面に押し出されてきている。モノトーンでの線描法は記号ではなく、イメージ処理を前提としている。中心部分の白い形は鍵穴の形状を3重にスライディング技法として描いている。

Ⅲ－2 部分画面1（左上）

ホルダー芯を使用した左下がりのハッチング描法で統一している。左側の植物はシャボテンの一種で、2重～5重のスライディング技法で時間の埋め込みを描いている。

Ⅲ－3 部分画面2（右上）

一つだけの閉じられた口を中央部分に配置している。ホルダー芯で描いているが、ピンク色を感じさせる色を鍵穴の右側部に薄く重ねている。右側には埋もれた太陽をイメージしたかたちを描いている。

Ⅲ－４ 部分画面３（左中）

連続した色彩部分は色相環となっていて、無限連鎖と色を取り囲み押し寄せる「光」をイメージしている。中心の口には黄土色が重ねてある。

Ⅲ－５ 部分画面４（右中）

下部に繋がる崩壊する壁を支える柱が背骨状に描かれている。右上の口には薄赤色と黄色の２つが重ね分けられている。

Ⅲ－６ 部分画面５（左下） Ⅲ－７ 部分画面６（右下）

分析的キュビズムの技法を取り入れ、瓦解した建物をイメージする立方体をトーンのオーバーラップ効果を利用しながら描出している。この部分は粒子が大きく反射率が低いことが特徴の木炭素材を使用している。下部の帯状の波形は柔らかいホルダー芯を使うことで、鉛色が占めることを防いでいる。

Ⅳ. まとめ

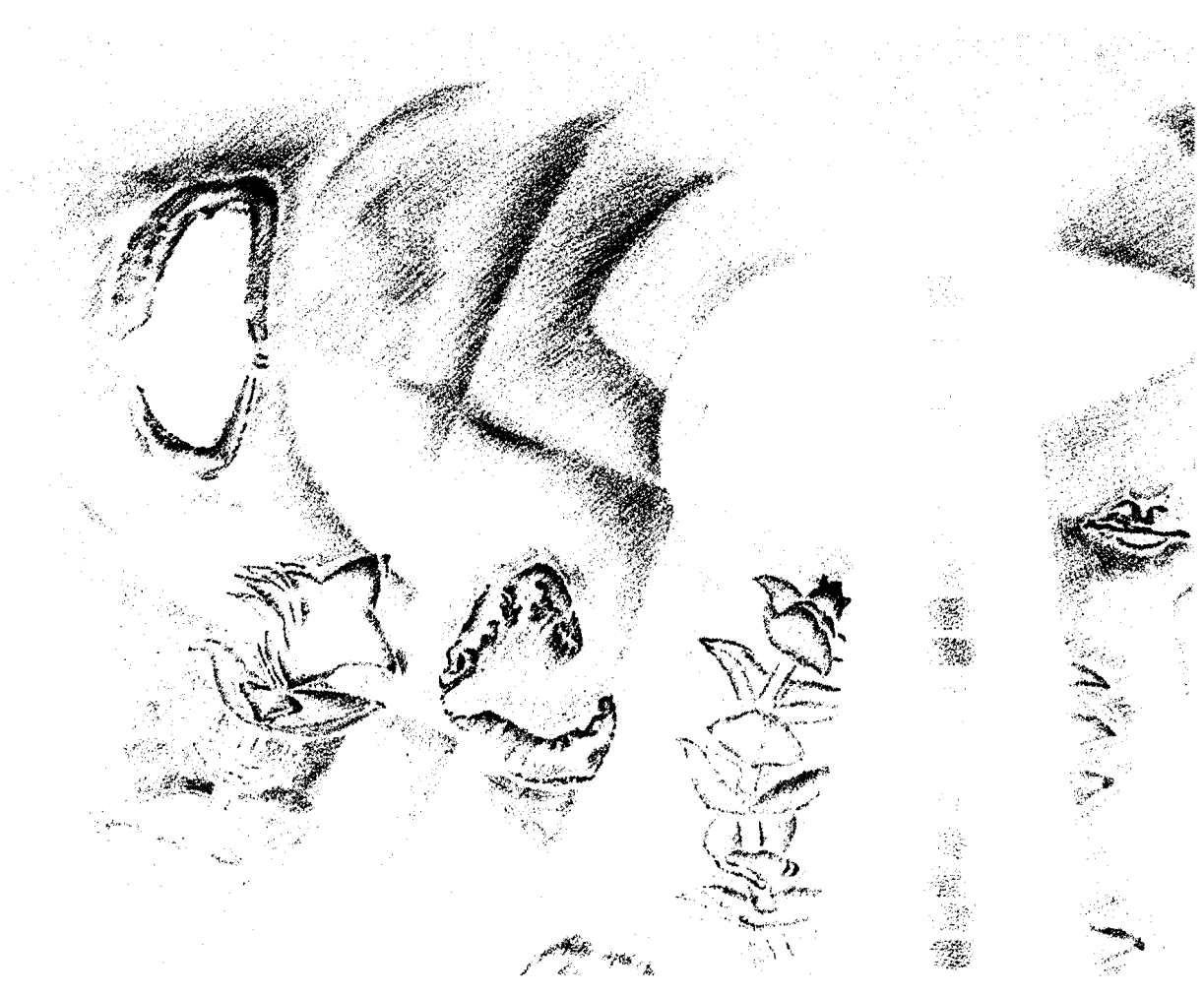
大サイズに挑戦して、視点が拡散するので安定感を増すため描線の濃度差をさらに広げる必要のあることが確認できた。色彩について、ほかに代えることができない本質的な可能性が漸く見えてきた。「形」と「色」という言葉で一般に表されている平面造形表現の二大構成要素について、第一歩を踏み出せそうである。



『破壊されたピラミッド』

全体画面 *Color Pencil and Pencil on Canson Paper* 1621 mm×1303 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅲ（金藤）



部分画面1（左上） 約 680 mm×840 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅲ（金藤）



部分画面2（右上） 約 680 mm×840 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅲ（金藤）

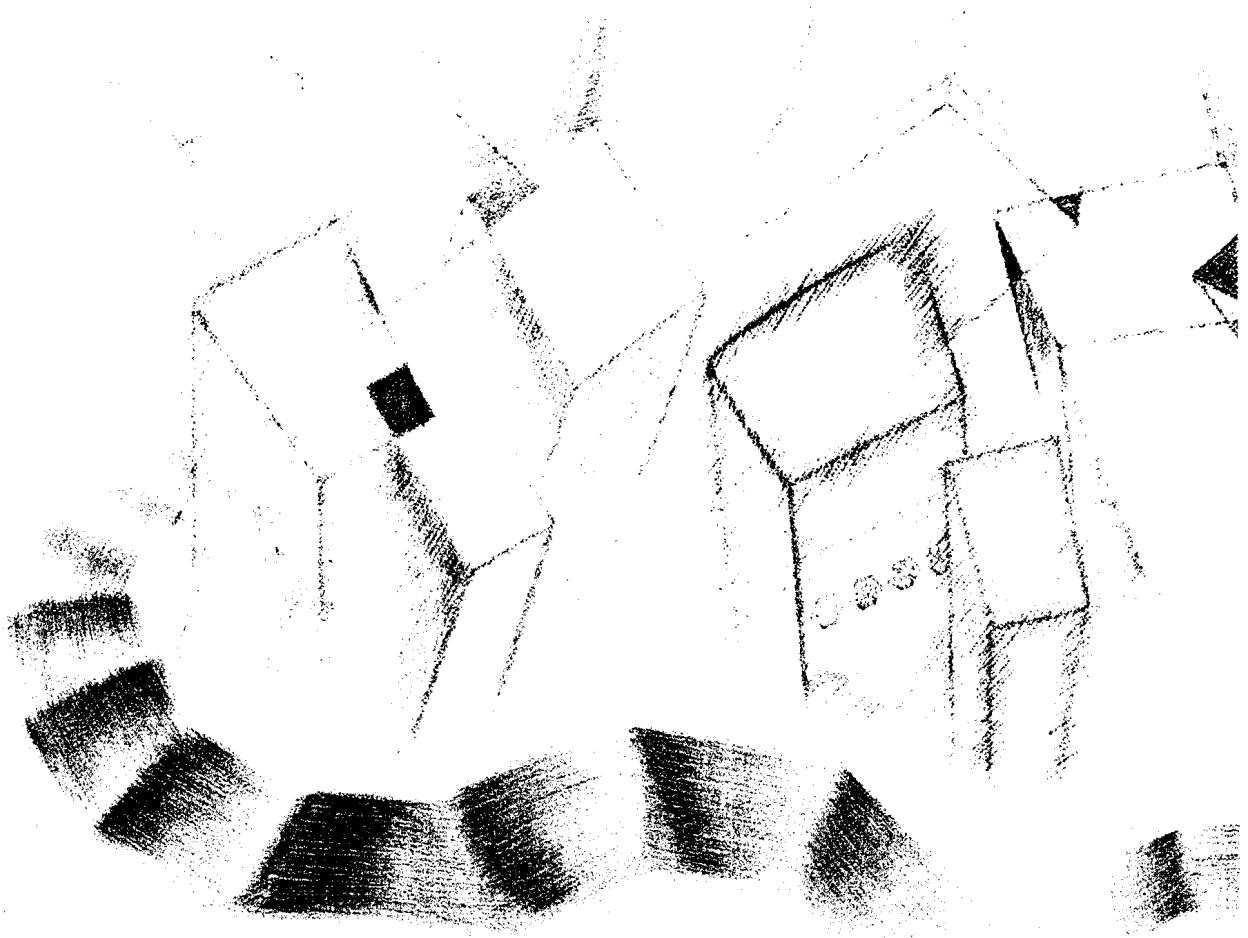


部分画面3（左中） 約 680 mm×860 mm



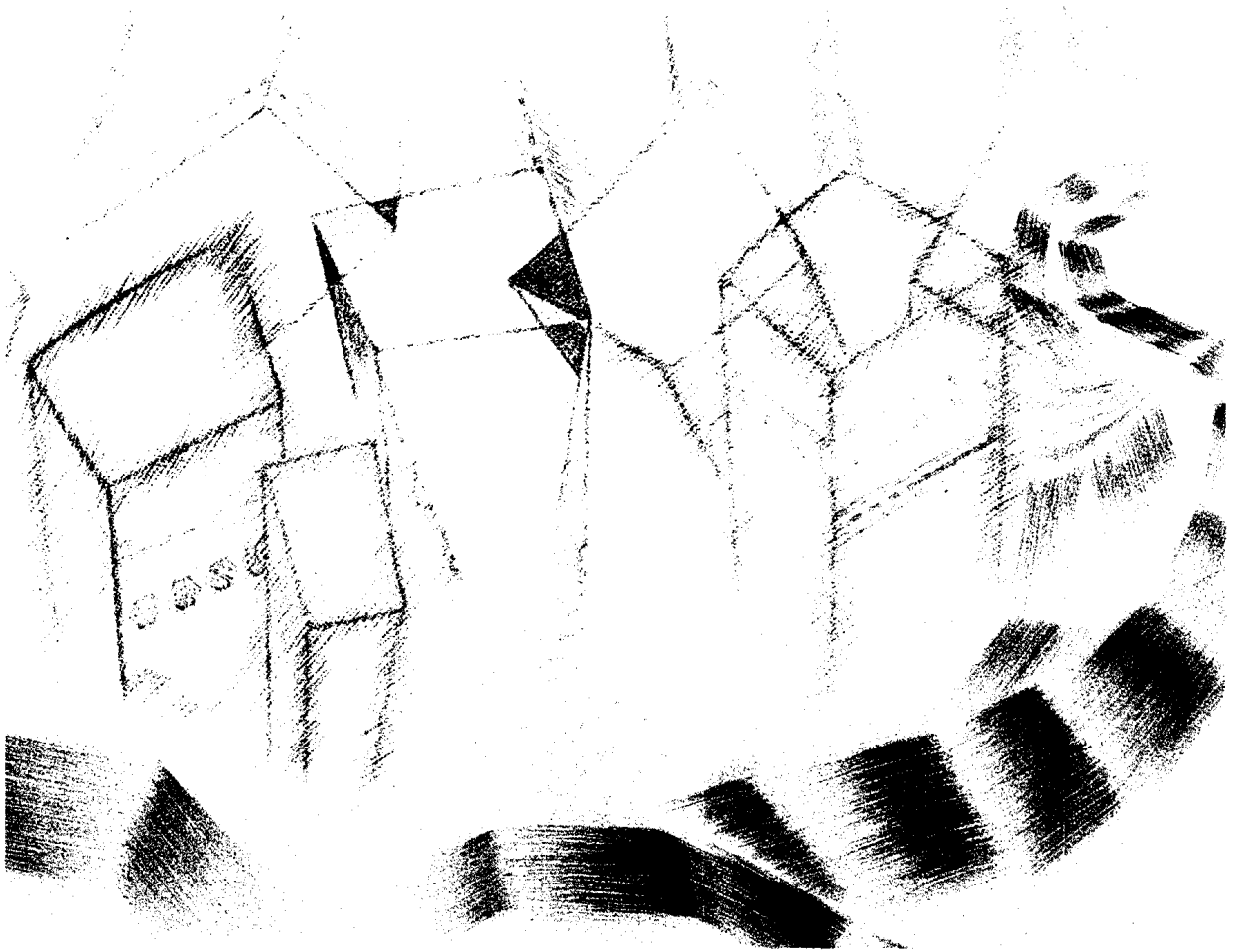
部分画面4（右中） 約 680 mm×840 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅲ（金藤）



部分画面5（左下） 約 640 mm × 840 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅲ（金藤）



部分画面6（右下） 約 640 mm×840 mm